

琉球大学学術リポジトリ

甘藷の重要性と将来

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-06-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮里, 清松, Miyazato, Kiyomatsu メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20514

5. ナカシロシタバ(イモヨトウ)

(イ) 卵は主として葉に1-2粒あて産下され、しかも1雌の産卵数は500粒にも達するので、産卵時期に葉、又は卵にひ酸鉛を散布すると大きな効果がある。

(ロ) 発生が著しい時はDDT 粉剤10アール当3kgを散布する(ひ酸鉛を用いても良い)。

(ハ) 大発生の際には群をなして移動するので、発生畑地の周辺に深さ30センチ、巾15センチ位の溝を掘って移動を防止する。

(ニ) 若い幼虫には除虫菌剤、又はデリス剤を用いても良い。(高良鉄夫)

甘藷の重要性と将来

近年における食糧事情の好転と、食生活の向上とによって、主食としての甘藷の役割は低下しつつある。更に甘味資源需給計画に伴う蔗作の振興によって甘藷の栽培面積は漸減の傾向をたどっている。琉球統計によると、1959年の収穫面積は甘藷119万アール、甘蔗90万アールでこれを1938年に対する比率で示すと、甘藷39.9%、甘蔗61.5%になる。更に耕地面積の比率をみると、1938年に甘藷49.3%、甘蔗24.3%であったのが、1959年にはそれぞれ26.4%、20.1%となり、甘藷は著しく減少している。

一方農務課の資料(1957-1960)によると、主食の自給度は30.58%(米20.25%、甘藷9.02%、馬鈴薯1.31%)で残りの59.42%は輸入食糧である。最近、貿易の自由化が叫ばれ、食糧の自給度を高めることについてはいろいろと異論がある。即ち国際分業的な見方からすれば零細な経営で能率の悪い食糧生産を行うよりも、安い外国農産物を輸入した方が良いとの考えもある。しかし国際収支をぬきにしてこれを論ずることは無意味であり、砂糖、パインなどを含めた農業生産物の他に移出物質の少ない現状では、国際収支の改善に対して農業の果す役割を高く評価する必要があり、自給度の向上によってドルの節約を図ることも大切である。また琉球の農業は自然的要因のほか、社会経済的要因とそれに伴う技術の後進性のために生産性が低く、国際競争力が著しく劣るので、ここ当分の間は保護政策をとりつつ、長期的計画で農業構造の改善と生産性の向上をはかって競争力を高めてゆく必要があり、全面的な自由化への切りかえは極めて困難を伴うものと考えられる。甘藷の将来もこのような農業事情を背景にして考えなければならない問題である。

琉球農業のいわゆる体質改善の1つとして甘藷を他作物に切りかえることも考えられるが、甘藷には飼料、食用としていくつかのすぐれた点がある。即ち甘藷は単位面積当りのカロリー生産量が作物中で最も高く、飼料としての価値も高い。将来食生活の改善によって畜産物の

需要が増え畜産振興が大きな課題となれば経営の合理化のための自給飼料の生産も必要となるであろう。近年いもを砕いてこれに米糠、フスマを混ぜて醗酵させ、貯ぞう可能ないも糠飼料の利用が行われ、茎葉のエンシレージ化もなされているが、このような貯ぞう飼料の利用は単に家畜飼料としての価値を高めるばかりではなく、諸作改善上からも重要な意義をもっている。即ち貯ぞう飼料の利用によって甘藷の一斉収穫が可能となり、それに伴って機械化が促進され、土地の利用度が高まり、「圃場即貯ぞう庫」という悪評も解消されることになる。

又甘藷は災害に対する抵抗性が強く、救荒作物としての役割も大きいので将来経済事情が好転し、食生活が向上しても保存、加工、栄養、調理などの点を改善すれば食用、工業原料としての需要を維持増進することも可能と思われる。更に又、甘藷は作物としての研究が十分に進んでいないので品種の育成、栽培法の改善による増収の可能性が高い。単収を高めて生産増強を図れば将来とも経済上有利な作物として栽培されるものと思われる。

以上甘藷の将来について述べてみたが、琉球農業自体の見透しが難かしく、生産技術も未解決の問題が多いので甘藷需要の長期的予測は極めて困難である。前述の予想に反して将来甘藷の需要が著しく減少することがあっても、之が農業構造の改善の結果として、琉球農業の発展を意味するものであれば喜ぶべきことではなからうか。

(宮里清松)